

秘書見習いの溺愛事情

プロローグ 夏目向日葵です

目の前にそそり立つ近代的なビル。その存在感に、夏目向日葵はコクリと喉を鳴らした。

「大きい……」

壁全面がガラス張りになっているそれは、降りそそぐ秋の日差しを鈍く反射させ、黒光りしている。決して眩しすぎないその光が、メタリックな外観をさほど違和感なく周囲のビル群に溶け込ませているのだが、それでも大学四年生の向日葵には高圧的な建物に思えてしまう。

シヨウノ・ホールディングス。  
明治時代、華族であった庄野院家は明治政府より勅命を受け、炭鉱開発事業に着手した。それを

発端として、激動する時代の荒波に揺らぐことなく事業を拡大してきたのだ。現在では、石油、天然ガスの開発と生産販売、それに関連する技術サービスを主な事業としている。

だが、そんな知識を持ち合わせていない向日葵は、ただただ眼前のシヨウノ・ホールディングス本社ビルの大きさに圧倒されていた。

ビルに出入りする人々も皆自信に溢れ、いかにも如才なく仕事をこなせそうな社会人オーラを

放っている。彼らを見ていると、自分がここにいていいものかと不安になってしまう。

——入り口にショウノ・ホールディングスの名前しか書いてないってことは、このビルで働いている人全員が、この会社の社員ってことだね。

——そんなにたくさんの方が必要な仕事か、この世にあるのかな？

正しくは、ここはショウノ・ホールディングスの本社。企業全体で考えれば、社員は日本全国どころか世界中にいた。だけど自宅とその周辺の商店街、そして大学の間のみを歩き来してきた向日葵には、そこまで考えが及ばない。

「こんな大きな会社の就職試験に、私が受かるわけないよね……」

面接を受ける前から、弱気が襲う。

どうせ落ちるなら、面接を受けずこのまま帰ろう。そんな思いまでこみ上げてくる。

大学卒業後は、家業である煎餅屋の手伝いをする気だった向日葵としては、こんな大きな企業で働く自分の姿なんて想像もつかない。

「——っ」

自分を落ち着かせるために、目を閉じて深呼吸を一つ。

すると、自然とあの人の顔が思い浮かぶ。

いくつもの本が落ちてくる中、自分を守ってくれたハムスター王子。

すっとした鼻筋と、切れ長の目。いかにも大人の男性らしい穏やかさは、どこか艶やかな黒毛の大型犬を連想させた。あの彼は、今もこの会社で働いているのだろうか。

「ハムスターが大好きな、ハムスター王子」

昔勝手につけたあだ名を口にするだけで、不思議と心が落ち着く。

まだ彼がここで働いているのであれば、なにかの偶然でもう一度会えるかもしれない。そう考えると、さつきまで弱気に覆われていた心に明るい光が射す。

「よしっ！」

向日葵は、気合を入れるために自分の頬を軽く叩いて、ショウノ・ホールディングスビルへと足を進めた。

自動ドアを潜り、大理石のロビーを進むと、正面の受付カウンターに座っていた女性が二人、同じタイミングで向日葵に会釈をする。向日葵は勢いのまま彼女たちに話しかけた。

「あの、すみません」

「はい、なんでしょう？」

——うわっ！ 二人とも美人で、なんだかお人形さんみたい。

思わず心の中で感嘆の声をあげた。

女性たちは髪を綺麗にまとめ、毛穴がないのではと思うほどに丁寧な化粧をしている。

——派手じゃないのに綺麗って感じさせるお化粧には、なにか特別なコツがあるのかな？

——それとも、持って生まれた素材の違いのせいかな？

何にせよ自分がどれだけ化粧を頑張ったところで、きっとこうはならないだろう。さすが大手企

業に勤める人は、化粧一つとっても違う。

——やっぱり私がこの会社で働くなんてあり得ない。

目の前にいる二人の女子力が圧倒されつつ、向日葵は遠慮がちにまた話しかけた。

「この時間にこの会社の高梨さんを訪ねるように言われたんですけど」

「高梨……?」

「はい」

今日の面接をセティングしてくれた彼は、受付で自分の名前を伝えるように言っていた。

「高梨とおっしゃられますも、当社には何人もいますので……」

受付嬢の一人が、困ったような笑みを浮かべた。

確かにこれほど大きな会社なのだから、同じ苗字の人はたくさんいるだろう。

「そうですよね。……えっと、もらった名刺に下の名前も書いてあったはず。……あ、あった!」

慌てて鞆を漁った向日葵は、彼からもらった名刺を取り出した。

「えっと……専務第一秘書の高梨秀清さんです」

「えっ!」

名刺を探す間、眉一つ動かさず穏やかに微笑んでいた二人が、小さく驚きの声を漏らした。

「もう一度、今のお名前を言っていただけでもよろしいでしょうか? あと申し訳ございません、

お客様の名前もいただきたいのですが……」

『お名前をいただく』という聞き慣れない言い回しに少し戸惑ったものの、すぐに名前を教えてほ

しいと言われていることに気付いた。

「専務第一秘書の高梨秀清さん。その人に、この時間に来るように言われているんです。私の名前は、夏目向日葵です」

「……夏目……向日葵……?」

両親が、すすく大きく育つようにと願って付けてくれた名前だ。自分では気に入っているのだが、初対面の人には怪訝な顔をされることも多い。

「はい。夏目向日葵です」

もう一度繰り返し返すと、受付の二人は微笑むことも忘れて、カウンターの向こうで来客リストに指を走らせる。そして「あった!」と小さな声をあげ、なにかを確認するようにお互いの顔を見つめた。

そして目で合図らしきものを送り合うと、向日葵に視線を戻して立ち上がり、深々と頭を下げた。

「失礼いたしました、夏目様。来客予定リストにお名前がありましたのに見落としておりました。

高梨は三十四階で待っておりますので、これを着けてそのままエレベーターでお上がりください」

「……『様』なんて」

こんな綺麗なお姉さんに『様』を付けて呼ばれると、なんだかこそばゆくなってしまふ。

向日葵は照れ笑いを浮かべながら『GUEST』と書かれた名札を受け取り、二人のお辞儀を背にエレベーターへと向かう。

エレベーターを待つ間、側に備え付けられている鏡で自分の姿を確認してみた。

身長一五〇センチちょっと。女子としても小柄な部類に入る自分の特徴といえば、ハッキリした二重の目と、癖のある栗色の髪くらいだろうか。

——ハムスター王子は、さっきのお姉さんみたいな綺麗な人たちに囲まれて働いているんだよね。だとしたら、特別人目を惹く容姿でもない、ましてや四年前に一度会っただけの高校生のことなど、忘れてしまっているだろう。

——私にとっては、忘れられないファーストキスの相手なのに。

そんなどこか拗ねた思いを抱えてエレベーターに乗り込む。

そうして向日葵は、ハムスター王子との出会いを思い出していた。

## 1 始まりは本屋さん

高校三年生の九月、学校帰りの向日葵はいつもとは違う駅で降り、そこに隣接した三階建ての書店に向かった。

丸の内のオフィス街の近くにある広々とした書店。中は、向日葵が普段寄り道する商店街の本屋さんとは違い、上品で落ち着いた空気に満ちている。店内に並ぶ本たちも、それだけで何故か商店街の本屋さんには並ぶ本より高級品に見えた。

——これで売っている本の値段が一緒って、なんだか変なの。

商店街でも扱っている煎餅や野菜は、原価や品質が同格なものでも、売っている場所によって値段が大きく違ってくる。だけど本は、東京だけじゃなく日本全国、どんな規模のお店でも値段が変わらないから不思議だ。

「これだけ本があれば、勉強したいこと見つかるかな？ ……それにしても、おばあちゃんには勝てないなあ」

向日葵は、昨夜のことを思い出して小さく唸りつつ、店内をゆっくりと歩き始めた。

児童文学——子供は大好きだけど、保育士さんってピアノ弾けないと駄目なんだっけ？

漫画コーナー——読むのは好きだけど、描くのは無理。

建築関連書籍——興味なし。

医療関連書籍——血を見る勇氣がないです。

気ままに店内を歩く向日葵は、それぞれのコーナーを覗いては、自分なりの考えをまとめいつた。

——それにしても、やっぱり大きな本屋さん、品ぞろえが違うなあ。

感心する反面、選択肢が広がりすぎて余計に悩んでしまう。

「別に大学行かなくてもいいんだけどな……」

こんな風に悩んでいるのは、昨夜突然、祖母の京子に大学進学を勧められたからだ。

進学校に通っているわけでもなく、進学など高校三年生二期の今になるまで一度も話題に上ったことがない。当然向日葵としては大学に進む気などなかった。

向日葵は、煎餅屋を営む祖父父母と三人暮らし。高校を卒業したら、家業である『夏目煎餅』を手伝うつもりでいる。

そう話す向日葵に、京子は頑ななまでに大学進学を勧めた。というより、強要したという方が正しいかもしれない。

しかも急にそんなことを言い出した理由が、「その方が『お徳な男性』との出会いがありそうだから」だというのだから、納得がいかない。

夏目煎餅の会計と、夏目家の財布の管理を一手に引き受けている京子は、損得勘定に厳しい。よくソロバン片手に、「最終的にお得なら初期投資は許す。だけど無駄使いは許さないよ」と、祖父

の勘吉に小言を言っている。その彼女の頭が、向日葵には大学進学させた方が最終的にお得、と弾き出したらしい。

勘吉は、「特に勉強したいことがあるわけでもなく、そもそも勉強が好きじゃない向日葵に、無理して進学させなくても……」とフォローを入れてくれたけど、普段から女房の尻に敷かれっぱなしの彼が京子に勝てるわけもない。結局向日葵は、急な進路変更を余儀なくされた。

——お店はいつでも手伝えるんだから、とりあえず大学に進学するのも悪くないかな。進学しなければ家を追い出しかねない勢いの京子を前に、向日葵はそう結論を出した。

とはいえ、向日葵にだって譲れない条件がある。

環境の変化が苦手な向日葵にとって、進学のためとはいえ家を出るなんてあり得ない。それには、早くに亡くなった両親の仏壇もあるので、離れるのは寂しい。

浪人せずに入れて、自宅から通える大学。……で、どうせなら、自分が楽しんで勉強できる学部がいい。だけどころな勉強なら楽しめるのかわからないので、それを考えるために、こうして大きな書店まで足を伸ばしてみたのだった。

経済経営——は、計算が苦手だから問題外……

ここに用はないと素通りしようとした向日葵は、一瞬鼻孔をかすめた爽やかな匂いに足を止めた。甘さを含んだ柑橘類のような匂い。その出所を探して周囲を見渡すと、背の高いスーツ姿の男性が二人、向日葵の目についた。

そのうちの一人、短い黒髪を後ろに流している男性は、真剣な表情で難しそうな経済の本に視線

を走らせている。もう一人の男性——銀縁の眼鏡を掛け、少しちぢれた鳶色の髪を左右に分けている彼は、二人分のビジネスバッグを持ち、黒髪の男性の様子を静かに見守っていた。

——若い……二人とも二十代だよね。若いのにビシツとしていて、ビジネスマンって感じ。

——それに二人とも、すごくハンサム。

若いのに上品な質感のスーツを着こなす二人の姿に、思わず見とれてしまう。

もちろん向日葵の暮らす下町の商店街でも、スーツ姿の男性を見かけることはある。だけどそんな人たちはビジネスマンというより、サラリーマンという言葉の方がしっくりくるのだ。

——この違いは、スーツの違いかな？

——ああ、襟元のバッジのせいかも。丸の内だし、会社がこの辺なのかな？

二人とも、向日葵にも見覚えのある有名な会社——シヨウノ・ホールディングスのロゴが入ったバッジを身に付けている。きつとそこの社員なのだろう。

本を物色するふりをして二人を観察していると、向日葵の視線は、自然と黒髪の男性の方へと引き寄せられた。

すっとした鼻筋と、伏し目がちにしても切れ長だとわかる目元。横顔でも端正な顔立ちであることが窺える。目尻が上がり気味の、鳶色の髪をした彼を猫だとすれば、黒髪の男性は穏やかな黒毛の大型犬を連想させる。

——それにしても、どうしてだろう……？

初対面のはずなのに、彼を見ていると不思議と懐かしい気持ちになる。そのまま説明のつかない

感情の出所を探っていたら、ふと、鳶色の髪をした彼が向日葵の存在に気付いた。

ギョッ！

漫画だったならそんな擬態語までつきそうな表情で向日葵の顔を凝視する。そうして本を読みふけているもう一人の男性の袖口を引っ張った。顔を上げた黒髪の男性は、鳶色の髪をした彼の視線を辿り、向日葵を見た。

「——っ！」

黒髪の男性は、さっきの彼以上に驚きの表情を浮かべ、息を大きく吸い込んだ。

なにか言いたげに自分を見つめる彼の視線に、向日葵の頬が熱くなる。

——私……なにか変かな？

そこで向日葵は、きつと難しいビジネス書が並ぶコーナーに高校生がいることに驚いたんだろう、と考えた。

——お仕事の勉強の邪魔をしてごめんなさい。

そんな意味を込めて軽く頭を下げる。それからビジネス書コーナーを抜けた向日葵は、旅行関連書籍のコーナーで足を止めた。

「……」

意識しないでおこうと思っても、視線は表紙を飾る飛行機の写真に引き寄せられてしまう。過去の記憶が蘇り、チリチリと焼けるような痛みにも胸を押さえた。

——飛行機に乗らなきゃいけないような仕事は絶対に無理。

小さく首を横に振り、逃げるようにその場から離れた向日葵は、今度は趣味の書籍が並ぶコーナーで足を止めた。

——お料理やお裁縫は好きだから、そっち関連がいいかも。

そのコーナーを見ると、お菓子作り、編み物といった女性受けしそうな書籍は左側に、将棋やゴルフといった男性受けしそうな書籍は右側に集中している。その二種類の書籍の間には、園芸やペットといった、両者に需要がありそうな書籍が並べられていた。

コーナーの中間あたりで立ち止まった向日葵は、四季の花々が紹介されている本を手にしてパラパラとページを捲った。

「……あつた」

わずかな写真が掲載されているページで手を止めると、懐かしそうに目を細める。

夏目なずな。

それが向日葵が六歳の時、父親の満作と一緒に飛行機事故で亡くなった母親の名前。

お互い植物の名前が付いていることがきっかけで付き合ひ、やがて結婚した二人は、生まれた最愛の一人娘に、『すくすく大きく、元気に育つように』という願いを込めて〈向日葵〉と名付けた。

——身長はご希望に比べられなかったけど、元気にやっているから許してね。

向日葵は、なずなの花の写真を指で撫でた。

「……ん？」

不意に、さっきの爽やかな香りが背後から漂ってきた。それと同時に、すぐ後ろに人が立つ気配

を感じる。

この香りは、さっきのビジネスマンのうちの、どちらかの香水だろう。

——さっきの黒髪の人、大人の男の人って感じがして、カッコよかったな。

——ああいう人は、どんな趣味を持っているのかな？ 後ろの人が、黒髪の人の方だといいのに。そんなことを考えながら、背後に立つ彼が本を選ぶ瞬間を待っていると、突然、目眩を感じた。

グラリッと足元から崩れるような揺れに驚いて、手にしていた本を落としてしまう。

慌てて体を屈めて本を拾おうとすると、再び視界が大きく揺れた。本能的な恐怖から身動きできなくなる。

その時、向日葵の肩にたくましい手が触れた。

「——！」

その手に引き寄せられ、背後から強く抱きしめられる。

自分を包み込む上質なスーツをまとった腕と爽やかな香りから、抱きしめているのはさっきのビジネスマンのうちのどちらかだということがわかる。けれどそれに驚く以前に、なおも続く揺れが怖くて身動きが取れない。

ドサツ バサツ

俯く視界の端に、本が乱暴に床に散らばっていくのが見える。

——地震！

向日葵は一足遅れで、この目眩が建物全体の揺れのせいであることに気付いた。



その間も揺れは続き、見せるレイアウトが仇あだとなったのか、本がいくつも床に打ちつけられる。中には大判サイズの本もあるようだ。

あんな本の角が勢いよく当たれば、酷ひどい怪我をするかもしれない。なのに、それらの本が自分に当たる気配はない。

——ああ、そうか。この人が、私を守ってくれているんだ。

向日葵は、背後から突然抱きしめられた意味を理解した。咄嗟とつさの判断で自分を守ってくれたその人が、二人のうちどちらなのか確かめたくて肩と首を大きく捻ひねる。

「……………あつ」

その瞬間、自分の唇に柔らかな感触が触れ、思わず息を呑んだ。

「——っ」

向日葵を抱きしめている人も、突然の出来事に驚いて息を呑んでいる。戸惑いを隠せない彼の息遣いが、触れ合う唇から伝わってくる。

向日葵も突然のことに頭が真っ白になり、まともや動けなくなってしまった。

——……………わ、私……………キスしてる。

向日葵は停止しかけた思考回路をどうにか動かして、何とかそれを理解した。と同時に、羞恥心しゅうちしんで足から力が抜けていくのを感じる。

いつの間にか地震は収まっていた。けれど心なしかまだ揺れているような気がして、その場に崩れ落ちる。

「大丈夫？」

すると相手との間に距離ができ、自分の口付けの相手が、黒髪の男性の方だとわかった。

「えっと……………」

守ってくれたお礼を言わなくては。頭ではわかっているのだけれど、言葉が続かない。

そんな向日葵に視線を合わせるため、男性が膝かかを屈めた。心配そうな視線を送ってくるその顔は、心なしか赤い。

「その……………こんなつもりでは……………」

戸惑った口調で話す彼の口元をつい見てしまい、向日葵は無意識に人差し指と中指で自分の唇を押さえた。混乱する頭で、これはファーストキスになるのだろうかなどと考える。

そうしているうちに、黒髪の男性は何か言葉を探すようにしながら向日葵に手を差し伸べた。

「あの日……………ハムスターを」

「若っ！」

その手に掴まろうとした向日葵は、突然の声に驚いて思わず手を引つ込めた。黒髪の男性も、弾かれたように姿勢を正す。

二人そろって声の方向に視線を向けると、さつき黒髪の男性と一緒にいた蒼色の髪とびいろの彼が、床に散乱する本を踏まないよう器用に飛び跳ねながら駆け寄ってきた。

「若、お怪我は？」

「問題ない」

「でも本が当たりましたよね。念のため、病院に行った方が……」  
「必要ない」

鳶色の髪のおろおろとした様子で、素っ気ない態度で答える黒髪の男性の全身を観察している。黒髪の男性は、「若」と呼ばれることにも、過保護なまでに心配されることにも慣れているのか、照れたり戸惑ったりする様子はない。ただ不機嫌そうな視線を相手に向けているだけだ。

—— 私なら、こんなに過保護に心配されたら恥ずかしくて困っちゃう。

—— それに普通に「若」なんて呼ばれて、この人何者なんだろう？

床に座り込んだまま二人のやり取りを見上げていた向日葵は、とりあえず立ち上がろうと床に手をついた。その拍子に指に本が触れる。

『可愛いハムスターの飼い方』。

丸い可愛らしい文字でそう書かれている本の表紙には、ヒマワリの種を持つハムスターの写真が掲載されている。

—— そういえばさつきこの人、ハムスターがどうのつて言っていたような……

—— もしかしてさつき手を差し伸べてくれたのは、この本を取りたかったから？

本を手に取り黒髪の男性を見上げると、向日葵の視線に気付いたのか、彼も向日葵を見た。

視線が合うだけで頬が熱くなってくる。けれど、相手は大人のビジネスマン。

—— きっと高校生との事故みたいなキスなんて、気にしてないよね。

—— 恥ずかしがっている私の方が逆に恥ずかしいかも……。気にしてないフリしなきゃ。

「……君が……」

「あのっ！ 好きなんですか？」

黒髪の男性とハムスターの写真を見比べていた向日葵は、恥ずかしさを誤魔化すように大きな声をあげ、手にしていた本を差し出した。

「……………えっ？ 好き？」

男性は、何故かぎよつとしたような顔をした。

「小さくて可愛くて、見ていて飽きないですよね」

「ああ……確かに、小さくて可愛い。……………好き、なのかもしれない」

—— そうか。やっぱりハムスターが好きなんだ。

—— さつきこの人の手に間違つて掴まったりしなくてよかった。

安堵の笑みを浮かべてさらに本を突き出すと、黒髪の男性は口をパクパクさせながらも膝をつき、本を受け取った。

「よかった。……………？」

そう言いつつも向日葵は、黒髪の男性がさつきより赤い顔をしているのに気づいた。

—— 私を庇かばったせいで、やっぱりどこか怪我をしたのかな？

そんな不安から、思わず男性の頬に手を伸ばす。

「——！」

「やっぱり、熱い。大丈夫ですか？」

——頭を打った拍子に熱を出すなんてことあるのかな？

頬から額へと探るように手を動かしながら、向日葵は心配げに黒髪の男性を見上げた。その拍子に彼と目が合うと、また自分の行動が恥ずかしくなってくる。

——私、初対面の男の人になんしてしているんだらう。

「ご……ごめんなさい」

「いや。それより……あの日の……」

慌てて手を引つ込めると同時に、鳶色の髪とびいろの彼が黒髪の男性の腕を引き、強引に立ち上がらせた。「若、やっぱり病院に行きましょう。若の身になにかあつたらっ！」

黒髪の男性は、軽いパニック状態で騒ぐ彼と向日葵とを見比べ、深いため息を吐いた。

「もういい」

そう言つて髪を乱暴に掻き上げた彼は、また向日葵に手を差し伸べる。

そこで自分がいつまでも床に座り込んでいたことに気付いた向日葵は、促うながされるようにその手に掴まった。触れた瞬間、大きくてたくましい掌てのひらの感触に、緊張して指先が跳ねる。

彼はそんな反応を気にする様子もなく、そのまま向日葵の手を引き、立ち上がらせてくれた。

「とにかく、君に怪我がなくてよかった」

「あ……」

「では、またいつか」

向日葵がお礼を言うよりも早く、黒髪の男性は踵かかとを返して歩き出した。

「若、待つてくださいっ！」

鳶色の髪とびいろの彼は、慌ててその背中を追いかけたが、途中で振り返つて向日葵に一度お辞儀をする。それから店員を呼びとめてお金を渡し、再び足早あせに主の背中を追いかけていった。

「……そうか、ハムスターの本の代金だ」

店員とのやり取りの意味を理解した向日葵は、こんな状況でもハムスターの飼育本を買っていく黒髪の男性を、奇妙に、また可愛らしくも感じていた。

——若つて呼ばれていたから、きつとすごいお金持ちなんだよね。

——王子様みたいに私を助けてくれたと思つたら、こんな風にハムスターの本を欲しがつたりして、なんだか変な人。

去り際に彼は、「またいつか」と言っていたけど、ただの通りすがりでしかない彼とは、もう会うこともないだらう。

——それは、ちょっと残念だな。

本が散乱する店内でクスクス笑っていた向日葵は、自分を助けてくれた彼のことを、勝手に「ハムスター王子」と命名した。

「ハムスターが大好きな、ハムスター王子」

言葉にすると、心がふわふわして落ち着かない。そんな思いを楽しむように、人差し指で唇をなぞってみた。

控えめなベルの音が鳴り、エレベーターの音声が指定の階に着いたことを告げてくる。  
ショウノ・ホールディングスビル三十四階。

自動ドアが開いた瞬間、驚きのあまり向日葵の肩が小さく跳ねた。

「夏目様、お待ちしております」

エレベーターのドアが開く前から深々と頭を下げていた女性が、そう言つて頭を上げたのだ。

優しく微笑む彼女は、受付で話した二人とよく似た雰囲気かみを醸し出している。

「えっと……」

受付の二人から、自分の来訪について連絡を受けていたのだろうか？

それ以前に、大企業の就職面接とはこうも丁寧なのかと驚いてしまう。就職面接を受けるのはこれが初めてだから、他と比べようもないのだけれど。

緊張する向日葵に、目の前の女性はまず「申し訳ありませんが……」と眉を寄せた。

「はい？」

もしかしてここまで来て、面接が中止になったのだろうか？

実のところ、就職活動を始めたのも、この面接がセッティングされたのも突然のことだった。だ

から突然面接が中止になっても仕方ないとは思う。

「専務は、先の来客の方との面会が長引いております。お約束どおりの時間にお越しいただいて申し訳ないのですが、少しお待ちいただいてよろしいでしょうか？」

——なんだ、そんなことか。

ホッと息を吐く向日葵を、女性はエレベーター脇の休憩スペースへと案内する。

——でも約束をしているのは専務じゃなく、専務秘書の高梨秀清さんだけ……  
そのことを伝えそびれたまま、向日葵はつい彼女の案内に従っていた。

こういう時、待たせる来客に失礼のないようにと設けられている休憩コーナー。見れば床から天井まで伸びるガラス窓の前に、革張りのソファセットが配置されている。

開放的な窓から見下ろせる東京都心は、ガラスの加工のせい或少し青みがかって見える。

——なんだか水槽の中にいるみたい。

静かな場所から見下ろす青い都市。その光景に見惚れていると、「お飲み物をお持ちします  
が……」と声をかけられた。

——ここは展望台の喫茶店ですか。

心の中で突つ込みを入れながら、一度は遠慮してみる。だけど彼女が「そのままお待ちしては、私が叱られます」と困った表情を見せるので、とりあえずお茶をお願いしておいた。

「こんなすごい会社、絶対受からない」

お茶を淹いれにその場を離れた女性の背中を見送り、向日葵は諦め気味あきらに呟いた。

ここから見る東京は、自分がいつも暮らしている街とは別世界のように思えて落ち着かない。

「ここ落ちたら、また一から就職活動しなくちゃいけないのか……」

あまりに目まぐるしく始まった就職活動について思い起こした向日葵は、「始まりは、相続税だったんだよね」と、唇を尖らせながら臉を伏せた。

◇ ◇ ◇

「ヒマ、アンタは相続税ってわかっているかい？」

先週の水曜日、向日葵は夕飯の片付けも終わった居間で、ノートパソコンを使ってレポートを仕上げていた。その時ちやぶ台の向かいでテレビを見ていた京子が言ったのだ。七十近くなった今も夏目煎餅の接客と経理をこなしている京子は、ピンツと背筋が伸びていて、実年齢よりずっと若く見える。

「相続税？」

言葉の意味ならわかる。親や親族などが亡くなったたりして、その財産を受け継いだ時なんかには相続金のことだ。

わからないのは、今急にその言葉が出てきた理由だ。テレビでは歌謡ショーが流れていて、相続税の話題など出ていない。

そんな向日葵の疑問を察したように、京子が「花田さんご夫婦わかるだろ？」と渋い顔で言う。

「うん」

花田夫妻は、古くからの夏目煎餅の常連で、最近ご主人の方が入院している。相続税について話している時にその名前が出ると言うことは……

ご主人の容態を案じた向日葵に、京子は心配するなどはかりに首を振って見せた。

そして、単に今後払う相続税のことを考え、ご主人の退院を機に今の一軒家を引き払って遠くのマンションに引っ越す決心をしたため、昼間挨拶に来てくれたのだ、と教えてくれた。

「この辺、最近地価が上がっていて、相続税もバカにならないらしいよ。アンタもいつかは相続税ってヤツを払わなくちゃいけないんだから、お金はちゃんと貯めときなよ」

お茶を啜る京子を前に、向日葵はちょうど開いていたパソコンで検索してみた。

「えっ！」

——ゼロの数が、1、2、3、4、5、6………嘘でしょっ！

この地域で夏目煎餅と同等の面積の家を相続する場合に支払う税金の概算に、顔が引きつる。

「ほう。なかなか掛かるね」

横からパソコンを覗き込む京子も、老眼鏡を押し上げて感心したように言う。

「こんなの私に払えるかな。このお給料で、この金額貯めるのは大変だよ……」

社会人になったらお給料を使って車の免許を取りたいとか、可愛い洋服を買いたいとか少なからず夢を抱いていたけれど、どうやら貯金の方を優先しなくちゃいけないらしい。

目の前の現実のため息をこぼしていると、京子は鼻先に老眼鏡をずり下げて、左の眉毛を吊り上

げながら上目遣いに眺めてきた。こんな顔で人を見るのは、相手の話に納得していない時の彼女の癖だ。

「なにを言っているんだい？」

「え？ なにって、大学を卒業したら私もこのお店を手伝うでしょ？ そのお給料はなるべく貯金しておいた方がいいよねって話」

「はあ？ なにをバカなことを言っているんだい。アンタをこの店で働かせるつもりはないよ」

「え？ なにそれ？ どういう意味？」

大学を卒業したら、今度こそ夏目煎餅で働く気でいた。もちろん今までだって空いた時間はお店の手伝いをしていただけで、それとはまた別に、正式な従業員として働くつもりだったのだ。

そう話す向日葵のおでこを、京子は「冗談じゃない」と言ってピシャリツと叩いた。

「アンタは、家の手伝いをして金を取る気かい？ せっかく大学まで行っただから、ちゃんとした会社で働いて、お給料稼いでおくれよ。もちろん手伝いは無給でさせるけど」

「そんな……………」

「なんだい？ 金をもらわなきゃ、店の手伝いはしたくないって言うのかい？」

不満げな顔をする京子に、向日葵は慌てて首を横に振った。今までだって、お店の手伝いをしてバイト料なんかもらったことはないんだから、この際お金はどうでもいい。それより重要なのは……

「私、大学卒業したらお店を手伝う気でいたから、就職活動してないんだけど」

今は秋。四年生はもう内定をもらっている時期で、求人なんてあるわけない。今頃就職活動を始

めるのは三年生だ。

そう説明しても、京子は聞く耳を持たない。

「アンタを大学に通わせるのに、いくらかかったと思っっているんだい？ その金額以上のお給料を余所で稼いでからじゃないと、店では働かせないよ」

「うっ」

正直に言えば、環境の変化が苦手な向日葵としては、知らない場所で知らない人たちに囲まれて働くなんて気が進まない。……だけど、お金の話をされると耳が痛い。

「しかもせっかく大学に行かせたのに、お前は大学と家とを規則正しく往復するだけで、合コンやらデートやらつてもものに出かける気配もないし。……なんのために大学に行かせたのやら」

——おばあちゃん、私になにをさせたくて大学に行かせたの？

稼ぎのよさそうな、もしくは夏目煎餅の婿養子にでもなってくれそうな結婚相手でも見つけてほしかったのだろうか？

生憎と、空いた時間は店の手伝いで忙しかった向日葵に、そんな出会いはなかった。というより、今まで誰かを好きになったこともない。

——高校生の時に、ちよつとドキドキした相手はいたけれど……

「これじゃあ、盗人に追い銭だね」

大学に進学したのは、京子に強引に押し切られてのことだったのに、随分な言われようだ。でもそんな反論は心の中に留めておいた。この家で、京子に逆らえる者などいない。

それを重々承知している向日葵は、周囲に酷く後れを取った状態で、しぶしぶ就職活動を始めたのだった。

翌日、大学の就職課で相談すると、「現実を見るために行っておいで」と、ちょうど週末に開催される就活セミナーを紹介された。

そこでこうして参加してみたのだが、説明を一時間も聞いてみれば、その〈現実〉とやらの意味がわかってくる。

予想はしていたけれど、新卒採用のエントリーはほぼ締め切られているらしい。セミナーに参加しているのも、来年就活をする三年生ばかりだ。就職浪人する他なさそうなものの、あれだけ財布の紐が固い祖母が許すとも思えない。

——どうしよう……っ！

込み上げる焦りに周囲をキョロキョロ見回していたら、突然後ろから誰かに手首を掴まれた。

「えっ……」

驚いて振り返ると、上品なスーツを着こなした長身の男の人と目が合う。

——誰？ あれ？ この人に……どこかで会った？

細い銀縁の眼鏡と、左右に分けた少し癖のある鳶色の髪。なんとなく見覚えがあるのに、どこの誰なのか思い出せない。小さな頭をフル回転させる向日葵を、鳶色の髪は怪訝そうな顔で見つめてくる。

「君が、どうしてここに？」

「あの……どこかで、お会いしました？」

かすかに残る記憶と、男の人の物言いから考えるに、やっぱり知り合いらしい。

「いや……あの……。それより、四年生の今頃になって就職活動？」

「……はい。急に就職することになったんですけど、ちょっと遅かったみたいです」

「ちょっとどころか……我が社も新卒採用の募集は終わってるし……」

向日葵から手を離れた彼は、その手で自分の口を押さえ、「でも、若がこのことを知ったら……」と呟く。そしてしばらくなにかを考えていたかと思うと、口元から手を離し、にんまりと笑みを浮かべた。

「とりあえず……」

そう言っただけで吊り目がちの双眸を細め、内ポケットから名刺入れと万年筆を取り出すと、一枚の名刺の裏に万年筆を走らせ、それを向日葵に差し出す。

「……？」

訳も分からず受け取った向日葵は、そこに書かれている文字を読んだ。

「ショウノ・ホールディングス……専務第一秘書……高梨秀清」

「そこに書かれているのが、僕の勤め先と名前です」

鳶色の髪は、高梨秀清はそう自己紹介をした。

「はあ……」

首を傾げる向日葵に、秀清は静かに微笑んで見せる。

——目つきのせいか、なんだか悪戯いたづらを楽しむ猫みたい。

「もしよかつたら、我が社にエントリーシートを出してみませんか？」

「え？ でも新卒採用は、終わっているんですよ？」

「そうですけど、もしかしたらなんとかなるかもしれませんよ。その名刺の裏に、僕の携帯電話の番号が書いてありますから、気が向いたらそちらに連絡をください」

状況が呑み込めないでいると、すこし離れた場所で誰かが秀清の名前を呼んだ。

「じゃあ、連絡をお待ちしています」

声のした方に軽く手を上げた秀清は、その場に向日葵を残して去っていく。

「なんだったんだらう……」

向日葵は、渡された名刺を眺めた。

——シヨウノ・ホールディングス………あつ！

聞き覚えのある名前だとは思っていたけど、シヨウノ・ホールディングスといえば、ハムスター王子が働いている会社の名前だ。出会ったあの日から四年が経っているから、今も彼が働いているかはわからないけれど。

「あ、そうだ……」

ハムスター王子のことを思い出すと、芋づる式に秀清のことも思い出された。

——あの日、ハムスター王子と一緒にいて、彼のことを「若」と呼んでいた男の人だ。

そう納得した向日葵は、すぐにまた首を傾げた。

——あれ？ でもなんであの人、私が四年生だって知っているの？

いくら考えても、答えは出てこない。

「まあ、いいや」

詳しいことは、今度会った時に本人に聞いてみよう。エントリーする気があるのなら連絡してほしい、と秀清は言っていた。就職の目途めどがちつともついていないこの状況でそんなことを言われた以上、もちろんエントリーさせてもらおうつもりだ。

——それに……

もしかしたら、もう一度、ハムスター王子に会えるかもしれない。

そう考えると自然と頬が緩んで、心に温かなものが広がっていく。



「お待たせしました」

声をかけられ、向日葵は慌てて目を開いた。

顔を上げると、さっきお茶を出してくれた女性がいつの間にかそこに立っていた。

——ああ、そうだ……

説明会の後、名刺をくれた秀清にさっそく電話をすると、出来るだけ早く面接したいとの回答が



あつた。だからこうして、週明け早々の面接となったのだ。

「専務がお待ちしておりますので、ご案内いたします」

向日葵はその言葉に立ち上がり、前を歩く女性の背中を追う。

「あ、そうだ、私が約束しているのは……」

専務ではなく、専務第一秘書の高梨さん。

そう言おうとした時、向かいから歩いてきた男性に肩がぶつかった。

「失礼」

慌てた様子の男性が、頭を下げる。廊下は十分に広いのだが、彼は手にしていた書類に視線を落としていたため、向日葵との距離感が上手く掴めなかったらしい。

「いえ。こちらこそ」

そう返す向日葵に再度目礼した男性は、ふと視線を向日葵の前を歩いていた女性に向けて苦笑いを浮かべる。

「やつと専務にお会いできましたよ。専務が予定を変更して急遽帰国したという噂を聞きつけて来たんですが、強引にでも押しかけてよかった」

どうやら彼の訪問があつたことで、向日葵は待たされていたらしい。

「お忙しい方です」

そう返す女性に、彼は「承知しております」と頷き、去っていった。

そんなやり取りに気を取られ、向日葵が面接の相手を訂正しそびれたことに気付いた時には、女

性は重厚な木製のドアをノックしていた。

「お見えになりました」

彼女が短くそう伝えると、すぐに中から「どうぞ」と声が返される。そしてドアが開かれた。

「あの……えっと……」

結局なにも伝えられないままドアを潜った向日葵は、見知った顔を見つけ息を呑んだ。

—— あっ、ハムスター王子……

入った部屋の正面、重厚感のあるデスクの前に座っている男性は、あの日、向日葵を助けてくれたハムスター王子だった。

目が合うと、ハムスター王子が静かに微笑んだ。その微笑に、向日葵の頬が熱くなる。

偶然の再会を願ってはいけれど、まさかこんな場所で再会できるとは……

驚いていると、ハムスター王子の傍らに立つ人が咳払いをした。

ハムスター王子に気を取られてすぐには気付かなかつたけれど、彼の座るデスクの側に秀清が立っている。

「あつ！ 高梨さん、こんにちは。履歴書持ってきました」

「ご苦労さまです」

秀清と簡単な挨拶を交わす間も、視線はハムスター王子に引き寄せられてしまう。

それと同時に、ある疑問が向日葵の胸を掠めた。

——専務室の立派な椅子に、ハムスター王子が座っているって……？

「こちら、弊社の専務、庄野院榎賢ゆきたくです」

急に表情を引き締めた秀清が、向日葵の疑問に答えるように紹介した。

「専務っ！」

「どうかした？」

思わず目を丸くした向日葵は、榎賢の問いかけに慌てて首を横に振る。

「ごめんなさい。すごく若く見えるのに、専務なんてビックリしちゃいました。それに、苗字がなんだか、この会社の名前と似ていて」

「なにをバツ……っ」

素直な感想を口にする向日葵に、一瞬驚いた様子の秀清がなにか言おうとする。だけど榎賢が手を上げてそれを制した。

「似ていますか？」

楽しそうに目を細める榎賢に、向日葵は恥ずかしくなりながらも頷く。

ゆっくりと動く榎賢の唇を見てみると、どうしても彼がファーストキスの相手であることを思い出してしまう。

「あの……えっと……『の』の音まで一緒だから。それに初めて聞く苗字で、珍しいなって思ったので、そう感じちゃったのかも」

「初めて……」

「はい」

前に本屋さんと会った時には、名前を聞くような状況じゃなかった。だから彼の名前を聞いたのは今日が初めてになる。

「そうか……。では夏目向日葵さん、初めまして。庄野院榎賢と申します」

榎賢が見せる社交的な笑みに、向日葵の心はかすかに痛んだ。

——初めまして……てことは、本屋さんで私を助けてくれたこと、覚えていないんだ。

榎賢からすれば、ハムスターの本を取ろうとした時に突然地震が起きたから、目の前にいた女の子を条件反射で助けただけに過ぎないのだろう。だとすれば、その女の子の顔なんて覚えていないし、もしかしたら事故でしかないあのキスのことも忘れてしまっているのかもしれない。

覚えられていても気恥ずかしいだけなのに、忘れられているのも悲しい。

——私、すごくワガママなこと考えてる。

思わず苦笑いした向日葵を見ながら、榎賢が革張りの椅子から立ち上がった。

「では、面接を始めましょうか」

「あっ！ はいっ！」

そう促され、向日葵はピンツと背筋を伸ばした。榎賢はそんな向日葵に、来客用のソファに座るよう勧める。

——危ない。ハムスター王子に会えたことで、面接のこと忘れるところだった。

内心冷や汗をかきつつ、向日葵は革張りのソファに腰を下ろす。

——こんな立派な会社、絶対受からないって諦めていたけど、庄野院さんと一緒に働けるなら頑張ってもいいかも。

京子に押し切られてしぶしぶ始めた就職活動で、初めて積極的な気持ちが生まれた。

「では、履歴書を見せていただいていいですか？」

向かいのソファに榎賢が座ると、その隣に座る秀清が手を差し出した。向日葵は求められるままに履歴書の入った封筒を渡す。

秀清が榎賢の見やすい位置で履歴書を広げた。

「志望動機は……大学の学費返済……あれ？ 大学進学にあたって、奨学金の借入はしていないはずでは？」

怪訝そうに眉を寄せる秀清に、向日葵は手をひらひらさせながら答える。

「お金を返すのは、祖父母にです。両親は既に亡くなっている……実家のお煎餅屋さんを継ぐ前に、大学に行くのに掛かった学費だけでも働いて返したいと思っています」

「なるほど。では将来的には、実家のお煎餅屋さんを継ぐ予定で？」

秀清の質問に向日葵は力強く頷き、そしてすぐに首を傾げた。

「どうして履歴書を見ただけで、私が奨学金を借りていないってわかるんですか？ それにこの前も私が大学四年生だって、最初から知っているような話し方をしていましたよね？」

「え？ ああ……そんなこともありましたね」

そう答える秀清に榎賢が何故か責めるような視線を向ける。秀清は、気まずそうに頬を掻いて目を逸らした。

「あの？」

「職業柄、相手の表情でわかるんですよ」

秀清に代わって、榎賢がそう説明する。

「表情で……」

——そこまでわかるものなの？

素直には納得できないものがある。不満げに眉を寄せると、榎賢が唇に人差し指を添え、優しく笑った。

——あ、その笑い方ズルイ。

そんなふうには微笑みかけられると、心がそわそわしてこれ以上追及できなくなってしまう。

「えっと……希望勤務地は東京都内？」

榎賢が話題を変えた。

「はい。実家から通いたいので」

「なるほど。住所は隅田川近くの………。この地域は、都市開発が進んだ今でも下町情緒が残っている、いい場所ですね」

「はい。とてもいい場所です」

誇らしげな向日葵に、榎賢が「どんなところが自慢？」と問いかける。

「私の家は、商店街でお煎餅屋さんをやっているんですけど、商店街のみんなも常連のお客さんも昔からの顔なじみで、みんなで大きな一つの家族みたいなんです」

「プライベートなんて言葉が通用しない、あけすけな人付き合い。特に同い年である桜井青果店のトオルとは、本当に家族同然の付き合いをしている。時には人と人との距離が近すぎて揉めることもあるし、付き合いが面倒臭いと思う時もある。だけど、そういう側面も含めて大切だと思える。」

「なるほど。楽しそうだね」

「楽しいですよ」

即答する向日葵に、榊賢は優しく目を細める。そんな榊賢に代わって、秀清が「いくつか質問させてください」と問いかけてきた。

趣味や大学生活で楽しかったこと、一緒に暮らす家族のことなどを質問され、向日葵はそれに正直に答えていく。

——就職の面接って、こんな感じなんだ。

面接というより、ただのお喋りのような気がする。

そんな質問が繰り返されたのち、秀清が榊賢を見た。

「若から、なにかご質問は？」

薄く笑みを浮かべ、二人のやり取りを見守るように眺めていた榊賢は、そう問われて向日葵を見た。

「えっと……そうだな………。その……ハムスターを飼っていますか？」

「はい？」

——変な質問……。さすが、ハムスター王子って感じもするけど。

——相変わらず、ハムスターが大好きなんだ。

微笑ましく思いつつもそう納得した向日葵は、目を細めながら首を横に振った。

「いえ。可愛いし、飼ってみたいと思いますけど、飼ったことはないです」

「そうか。私からの質問は以上だ」

榊賢が満足げに頷いて、その日の面接は終わった。



「世間知らずにも程があります」

向日葵が帰った後、榊賢のコーヒーを淹れていた秀清は、やや憤慨した様子で声をあげた。

「彼女がか？」

「ええ。面接時のマナーもなっていないばかりか、若の苗字を聞いて『苗字がこの会社の名前と似ていて』ですよ。江戸時代は大名家、維新後は華族として日本を代表する大財閥を築いた庄野院長の次期当主である若に対してあの言いぐさ！ 似ているのではなく、ショウノ・ホールディングスは、若の会社なんです。二十八歳の若さで専務という役職を務めていることから、容易に想像できるはずですよ」

一部向日葵の口調を真似て主張する秀清を、樽賢は手で遮りながら訂正した。

「その言い方は正しくない。将来的に社長になる予定ではあるが、会社は個人のものではない」

「八〇パーセント以上の株をお父上と若が有している段階で、若の会社と言っても過言ではありません」

「では父の会社と言うべきだろう。現在の筆頭株主は父だ」

だが、親子で有している八〇パーセント以上の自社株の内、半分近くを樽賢が所有しているのも事実。

「庄野院家の跡取りは若お一人。将来的には若のものです。旧華族である名家の家長として、その威厳を保つ心構えでいてください」

この手の話になるとやたらムキになる秀清と話をするのは骨が折れる。樽賢は肩をすくめつつ、別の質問を投げかけた。

「その他に彼女をどう思った？」

「ハムスターみたいですね。小柄で癖のある栗色の髪、どんぐり眼まなこって言うんですしたっけ？ 黒目がちな大きく丸い目……なんだかハムスターを思い出しますよね」

履歴書に張られた写真に目をやり、秀清が答えた。

「ハムスター？ 似ているかな？」

自分には、無条件に守ってあげたくなる、愛護すべき対象に思えるのだが。そう思いつつ樽賢は、傍らにコーヒーを置く秀清を見上げた。

「似ていますよ。ハムスターがハムスターを欲しがる」というのも、妙な話ですが」

「……」

クスリと笑う秀清から視線を履歴書に移した樽賢は、先ほど向日葵に「初めまして」と挨拶した時のことを思い出していた。

本当なら「覚えていますか？」と聞きたかった。だけどどこまで遡さかのぼってそう問いかけたのかわからなくて、咄ちや嗟さにそんな挨拶をしまった。

そして「初めまして」と当然のように返した向日葵に、静かに落胆したのだった。

——あの時、彼女は六歳かそこら。

——しかもあんな酷ひどい事件の直後。

自分と出会ったことや、交わした約束のことなど、覚えていなくてもしょうがない。

その後、向日葵が高校生の時に偶然にも再会しているのだが、さっきのやり取りから察するに、その記憶も残っていないらしい。なかなか衝撃的な出来事だったから、そのこと自体は覚えているのかもしれないが、その相手が自分だということには思い至らないようだ。

——若い彼女から見れば私など、取り立てて特徴のないサラリーマンに見えるのだろう。

頭ではそう理解しているのに、感情の部分でどうしても落胆してしまう。

「若、どうされました？」

樽賢は、秀清の声に顔を上げた。

「いや、なんでもない。それより彼女の内面について、お前の評価は？」

「バカですね」

さらりと答えた秀清は、ムツとする榎賢にからかうような視線を向けながら言い直した。

「失礼。……バカ正直なくらい、純粋な子と言っておきましょうか」

「なるほど。それがお前の見解か」

代々庄野院家の家令として忠義を尽くしてきた高梨家。その長男である秀清は、父親が榎賢の父・榎治の秘書だったこともあり、幼いころから共に育った。そして自分も先祖に倣い、庄野院家の跡取りである榎賢に仕えることに強い誇りを持っている。その忠誠心を疑ったことはないが、彼自身にはどこか人を喰ったようなきらいがあり、油断するとすぐに揚げ足を取られてしまう。

だから、高校生になった向日葵に偶然再会した日、事故とはいえ彼女の唇が自分の唇に触れたことも、その時に自分の胸に淡い思いが溢れたことも、秀清には話すまいと決めていた。

秀清はきつと、榎賢が同情心から向日葵を気にかけているに過ぎないと思っっているのだろう。

——確かに最初はそうだった。

十数年前の（あの日）以来、涙で瞼を腫らした向日葵や、あの小さな手の感触がずっと忘れられなかった。だから定期的に人を遣って、彼女の成長を確認させていたのだ。

幸せでいるのなら、それでいい。でももしなにかあったら、必要な手助けはしてあげたい。

そんな思いで遠くから見守っていた向日葵と、四年前、偶然にも本屋で再会した。

声をかけようかと悩んでいる時に突然地震が起き、咄嗟に向日葵を守った。その拍子に抱きしめた彼女がもう小さな女の子ではなくなっていることに驚き、同時に何故か胸が高揚するのを感じた

のだ。しかも偶発的とはいえ、あんなこともあったし。

——あれはキスにカウントしていいのだろうか？

——しかも動揺のあまり、告白めいたことも口にしてしまったのだが……

向日葵がそれを覚えていないのだから、どうしようもない。

「若、どうかされました？ 心なしか顔が赤いですよ」

「気のせいだ」

「それにしても、若も無茶をされますね」

ポーカーフェイスを装ってカップに口をつける榎賢を見て、秀清がため息を吐く。

「なにがだ？」

「確かに私は、彼女が急に就職活動を始めた理由を若がお知りになりたいだろうと思ひ、先日の説明会で彼女に声をかけ、面接をセッティングしました。……ですが、そのために若が出張を早々に切り上げて帰国するとは思っていませんでした」

その出張の際も、向日葵からの急な連絡があるといけないからと、秀清を電話番号として残していったのだ。

「商談は滞りなく済ませしてきた。無駄な接待や、会食を断ってきただけだ。会社には、なんの損害も与えていないはずだが？」

文句は言わせない、と榎賢は視線で牽制する。

「もちろん。我が社には、なんの支障もありません。ただ、先方が気の毒で」

商談といつても、優位に立っているのはショウノ・ホールディングス。少しでも心証を良くするため、先方は万全のもてなしをしようと構えていたはずだ。なのに到着するなり有無を言わざぬ勢いで商談を推し進め、それがまとまった途端に帰国した樗賢をどう思っただろうか。きつと今頃、自分たちのな気が障ったのかと、重役クラスが頭を寄せ集めて検証していることだろう。

「……先方にも、悪い条件にはしていないつもりだが？」

「なおさら気の毒です」

怒っているらしき相手に推し進められた、悪くない条件での契約。代わりにこれからどんな無理難題を押し付けられるのだろうかと邪推しているに違いない。

意味が分からないと眉を寄せる樗賢に、秀清が「それで、彼女のことをどうしますか？」と問いかけた。

「どうするとは？」

「我が社の新卒採用は締め切っておりますし、内定式も終わっています。それに彼女の学歴では、端から我が社の採用基準を満たしていません。……ただ若が、彼女の就職を支援したいとお考えでしたら、彼女の希望条件に見合う子会社か系列会社にも受け入れるように手配しますが？」

「そうか……」

視線を落としながら、樗賢は拳を作つて顎を押さえた。

——夏日向日葵。彼女に会うのは、今日で三回目……

十数年という年月の間、それだけしか会つていなかった彼女が、気になつてしようがない。

昔は、彼女が幸せに暮らしていることだけを純粋に願っていた。そんな思いに、妙な感情が混ざるようになったのは、高校生の彼女と偶然の再会を果たしてからだ。

以来、再び彼女に会いたいと、ずっと願っていた。さつきの面接でも、自分の暮らす街のことを楽しげに話す彼女から目が離せなくなっていた。そしてそんな姿を見ただけで、過密スケジュールで疲れていた心身が癒されていくのも感じていた。束の間の癒しを味わった心は、貪欲にさらなる癒しを求めてしまう。

——まるで、歯止めのきかない媚薬のようだ。

苦笑いを浮かべ、顔を上げた樗賢は、黙つて自分の答えを待っていた秀清に問いかけた。

「もし私が、彼女を本社採用にしたいと言つたらどうなる？」

それを聞いた秀清は、「ほうっ」と内心感嘆の息を漏らした。

物欲が薄く、職権乱用を嫌う樗賢が、公私混同ともいえる発言をするのは意外だった。十数年もの間、主が夏日向日葵という存在に固執していること自体理解できずにいる秀清には、当然この発言の理由もわからない。だがいつも仕事最優先で、個人的な要望などないに等しい樗賢がそんな発言をするのであれば、その思いを尊重すべきと考える。

「ショウノ・ホールディングスは若の会社です。若が望むのであれば、採用基準を曲げて新卒採用者を一人や二人増やすことなど、造作もないことです」

秀清は、驚きを抑えながら答えた。

「会社は……」

自分のものではない。そう言いかけた榎賢は、深く息を吐き視線を落とすと、再び拳で顎を押さえた。

——こんなことを言い出すなんて、自分はどうかしている。冷静な部分ではそう思うのだが、夏目向日葵に関するとなると、いつもの自分ではいられなくなってしまう。

長い沈黙の末、榎賢は観念したようにまた息を吐く。

「では、彼女を本社採用、かつ私の秘書にするよう手配してもらおう」

「若の……秘書ですか？」

「もちろん私の第一秘書は生涯、秀清だけと決めている。よって彼女は第二秘書、もしくは秀清の補佐という扱いでいい」

「ですが……」

「無理か？」

なにか言いかけた秀清だったが、次の瞬間その言葉を呑み込むように深々と頭を下げた。

「若が望むのであれば、そのように手配させていただきます」

「ではそれを望もう。それと出来るだけ早く、彼女を手元に置きたいと思う。……さて、この話はこれまでだ」

ため息とともに咬いた榎賢は、秀清に向日葵の履歴書を渡す。

そうして残りのコーヒーを飲み干し、仕事の書類に目を通し始めた。

### 3 ハムスター王子の訪問

ショウノ・ホールディングスを訪問した次の日、大学帰りの向日葵は、一軒の古い日本家屋の前で足を止めた。

——花田さん、もう引越しちゃったんだよね。

京子から、花田家の引越しは先週末に済んだと聞いている。だが——

「車？」

今は空き家になっているはずの花田家の前に、一台の高級車が停まっている。

「もしかして、噂の地上げ屋さんの車かな？」

花田夫妻が引越した後でお店のお客さんから、夫妻が地上げ屋から酷い嫌がらせを受けていたという噂を聞いた。確かに隅田川流域の都市開発が盛んになってから、強引な地上げ屋の噂はたびたび耳にしている。だがそれはどこか別の街の話で、自分が暮らすこの街には関係のない話だと思っていたのに。

向日葵は、背伸びをして垣根越しに中を覗いてみた。

鉢植えや洗濯物が消えた庭は、それだけでどこか色褪せて見える。そんな庭で、スーツ姿の男性が三人話しているのが見えた。



その内二人は中年で、自分たちより若い男に身ぶり手ぶりしながらなにかを説明している。細い目の左下に泣きボクロがある若い男は、二人の説明に頷き、薄い唇の端を吊り上げて意地の悪そうな笑みを浮かべていた。

——なんかトカゲみたいな顔してる。

——あの若い人が、地上げ屋さんのボスなのかな？

好感の持てない笑顔に眉を寄せていると、泣きボクロの男が不意に向日葵の方に顔を向けた。

——うっ、目が合っちゃった……

頭をひっこめ損ねた向日葵がどうすればいいのだろうかと思っていると、男が煩わしそうに息を吐く。そして侮蔑するような視線をこちらに向け、邪魔な虫を追い払うように手をひらひらさせた。

その眼差しから推測するに、自分の価値観だけで人の優劣を決めて、一旦劣っていると判断した相手は平気で見下すタイプなのだろう。

「……っ、なんだか、感じ悪い……」

向日葵は誰にも聞こえないような小声で唸ると、頭を引っ込めてその場を離れた。

「確かに、勝手に家を覗いていた私が悪いんだけど……」

さっきの男の態度を思い出し、向日葵は唇を尖らせる。

花田夫妻が手放した家をあの男たちが購入したのであれば、勝手に覗き見していた向日葵の方が

悪い。あの家だって、彼らがどう扱おうと文句は言えない。

花田夫妻が長年暮らしてきた家だから、出来れば大切に扱ってほしいけれど、さっきの男の態度を思い出すと、その願いは叶えられない気がする。

花田家を後にした向日葵は、自宅の看板が見えてきたところで、後ろから追い越していく車の姿に足を止めた。

お店の前の道は、軽自動車二台がどうにかすれ違えるくらいの幅しかない。そんな道に不釣り合いな高級車が侵入してきて、夏目煎餅の前で停まったのだ。

あの入り口を塞ぐような停まり方からして、向日葵の家に用があるのは明らかだ。

——うちにも地上げ屋？

車に詳しくない向日葵だけど、花田家の前に停まっていた車と車種が違うことは辛うじてわかる。とはいえ、見慣れない高級車に警戒心が働く。

慎重に店に近づくと、運転席のドアが開き、ドライバーが降りてくる気配がした。

地上げ屋の中には、土地を手放した方が楽と思うほどの嫌がらせを仕掛けてくる者もいるという。

向日葵は、鞆の肩紐を握りしめて身構えた。

「……高梨さん」

向日葵は、車から降りてきた人の姿を確認して、表情を緩めた。そんな向日葵に秀清は軽く目礼だけして、後部座席のドアを開ける。

秀清が恭しく頭を下げると、開かれたドアからもう一人の人物が姿を見せた。

——ハムスター王子……じゃなくて、庄野院さん。

「どうしたんですか？」

思わず駆け寄る向日葵に、樗賢は軽くスーツを直しながら、はにかんだ笑みを浮かべた。

「やあ。君に話があつて」

「なんですか？」

彼の言葉を聞き逃さないよう真つ直ぐ見上げると、樗賢は何故か向日葵から視線を逸らして秀清を見た。すると秀清が口を開く。

「実はですね……」

その時、秀清の言葉を遮るように木製の引き戸の開く音がして、お店の暖簾が勢いよく捲れた。

「なんだ、なんだ？ ……おう、ヒマっ！ おかえり」

祖父の勘吉が、店先に停まる高級車に興味を持って顔を出した。生粋の江戸っ子で、良く言えば職人氣質、悪く言えば頑固者かつ短気な勘吉は、無遠慮な視線を車、秀清、樗賢へと順に巡らせ、最後に向日葵を見た。

「ただいま、おじいちゃん。この人たちは私のお客さん。私に話があるんだって」

「お前に？」

露骨なまでに怪訝そうな眼差しを向けられても、樗賢は気にする様子もなく、穏やかな表情で胸元のポケットから名刺入れを取り出し、その一枚を勘吉に差し出した。

「挨拶が遅くなって申し訳ありません。私……」

「へええ。シヨウノ・ホールディングスの専務さん。そっちの彼は？」

勘吉と同様に車が気になったのか、祖母の京子も店先に顔を出す。そして勘吉より素早く、差し出された名刺を奪い取った。

「俺がもらった名刺だぞ」

名刺を取り返そうとする勘吉をひょいっとかわした京子は、樗賢と秀清を見比べた。

「庄野院の秘書を務める高梨と申します」

秀清がそう自己紹介すると、京子は納得した様子で頷いた。

「で、そんなお偉い人が、うちの向日葵になんの用で？」

「私、昨日この会社の面接受けたでしょ。だから、そのことで用事があるんだと思う」

懲りずに名刺を取り返そうとする勘吉を器用にかわしながら、京子は笑みを浮かべた。

「ああ、そういえばそんなことを話していたね。わざわざ家まで来てくれるってことは、もちろんいい返事なんだろうね？」

——えっ！ そうなの？

思わず向日葵も、二人に期待のこもった眼差しを向けてしまう。

「ええ……実は……」

「まあ、立ち話もなんですから、家が上がってください」

京子は樗賢の腕を掴むと、半ば強引に店の中に連れ込もうとする。

「あ、若……！」